

第1回 丹波市丹（まごころ）の里創生総合戦略推進委員会

日時 令和2年7月28日（火）
19時00分～21時28分
場所 氷上住民センター実習室

出席者（敬称略・順不同）

○委員 北村久美子委員、大野亮祐委員、谷水ゆかり委員、畑道雄委員、中川優一委員、中川フェテレウォルク委員、大木玲子委員、谷川昌幸委員、岡誠委員、山下淳委員、西谷伸一委員、荻野祐一委員

※欠席：岡絵理子委員、北山芳明委員

○丹波市 鬼頭哲也副市長

（事務局）近藤政策担当部長、清水総合政策課長、山崎総合政策課副課長、荻野総合政策課政策係長、大野総合政策課政策係主査

1 開会

2 副市長あいさつ

3 自己紹介

4 事務局紹介

事務局職員の自己紹介を行った。

5 協議事項

（1）第2期丹波市丹（まごころ）の里創生総合戦略の進捗状況について

- ・第2期丹波市丹（まごころ）の里創生総合戦略の進捗状況について【資料1】
- ・地方創生推進プロジェクト進捗管理シート【資料2】
- ・都市・自然環境を活かした公園整備方針（案）【資料3】

※事務局より説明

質疑・意見

委員：婚活支援事業を受託している。計画のPDCAが基本だということだが、婚活事業のような小さな事業も確実にPDCAを実施していかないと改善できないと感じている。周りとは相談しながら良い方向に進められるような仕組みを末端まで整備してほしい。婚活支援は今年度から子育て支援課が担当となり、少し色合いが変わってきた。結果を出さないといけないということで担当課長ともすでに3回ほど面談をしており、良い方向に進むのではないかと思っている。婚活を取り巻く社会状況変化しており、今はアプリでどんどん出会える時代。丹波市の良さをどう残していくかということ、社会情勢に合わせ、その年の目標を変えて取り組む必要があると思う。ひとりひとりのおせっかいというとても良い仕組みがあるので、確実に出会いに繋げていけるようにと考えている。産前産後サポートのハッピーバースパックについては、丹波布のかわいらしいおもちゃを見て、すごく感動した。女性の心を動かすようなものを贈ってあげられたらすごく良いと思う。公園整備については、青垣の子育てグループから話を聞いたときに、更地になっている前の青垣住民センター跡地を利用できるようになると、もう少し幅広い年齢の子どもが集まれるという意見があった。国道の整備と併せて進めてもらえたと思う。コロナで自粛になった時に、子どもたちに、前山地区で取り組んでいる居場所に来てもらえるようにと、校長先生や民生委員さんと相談したが、それぞれの担当部署の垣根があって、話ができないまま終わってしまったことがある。地域で子どもを見守っていくということで、こんな予期せぬことが起こった場合に、仕組みや窓口になるところなどの体制を整えてもらえると地域も安心して生活できると思う。

委員：病児保育について、子育て世代のお母さんにアンケートを取ると、病児保育の整備については需要があるが、病気の時には本当は子どものそばに居たい、本当は無理して保育園に預けたいとは思っていないことを理解してほしい。コロナウイルスの関係で休んだ社員に対して、特別有給休暇を取った分、会社にお金を補填するという制度がある。子どもがいて在宅ワークをしないといけないなどの場合に会社にお金を補填するという制度。とてもよくできた制度だと思い、私の会社でも積極的に活用させてもらった。本当にお金をかけるなら、この制度の真似をしたら良いと感じている。看護師の手配や施設の整備にお金をかけるのであれば、会社にお金を補填し、気持ちよく休んでもらえるような制度も検討してほしい。

委員：基本目標1の手段「地域をあげて・・・」というところについては、もう少し地域

をあげてという感じが出たらよいと思う。例えば、命をテーマにした展覧会を市民と一緒に開催するなど。公園のあり方については、子どもだけでなく、多世代が集ったり活動したりできる、公園プラス市民活動ができる、まちで活動している人と子どもたちが接する機会になるような視点があれば。

会長：公園がどう変わるか、見える化できるような視点が大切。

委員：移住相談を受け、地域に案内するときに、自治会長さんや組長さんなどの地域の役員の方との面談を行い、双方のことを知っていただいたうえで契約してもらっている。その時、顔を合わせ、移住してくる方のことを知ってもらうことができればその後のつながりがすごく深まる。移充テラスのスタッフでも、一度地域に入った後、事情があり地域外に出たが、子育てするなら…と、もともと居た地域に戻った者もいる。そんな様子を見ていると、周りの人が見ているなと感じることができ、この地域なら安心して子育てができるなというふうに感じるができると思う。お金や物をもらえるのも良いと思うが、地域で…というところが重要だと思う。公園について、移住者とのやりとりの中で思うのは、公園というより、山や川で遊ばせたいという声が多い。安全に遊ぶ技術は必要。公園なら手放しで遊ばせておけるが、丹波市がこれだけ森林が多い地域であり、里山であるから、公園ではなく、山で遊べる場所はないですか、川遊びができる場所はないですかという問い合わせは多い。

副市長：今の指摘は非常に重要だと感じた。特に、地域で子育て世代を温かく見守っていくというのは非常に重要だと思う。しかし、施策的にはどんなことを市としてやっていけばいいのか、どんなことを望まれるのか。

委員：空き家バンクの仕組みの中で、地域と結びつけるときには、世代を越えた繋がりを作っている。

会長：移住してきた方が地域との繋がりをしっかり持てる、そういう生活が確保できれば子どもが生まれたときも地域から祝福されるし、子どもが成長していく過程を地域で見守ってくれる。そうすると副市長のご指摘のように、まず地域とのつながりをどのようにうまく作ってイけるのか、市として何ができるのかというところに行きつくと思うが、私が今話を聞いていて思ったのは、市として直接的にできることはないのだろうということ。移住・定住の支援センターや地域の役員の人など、地域のキーパーソンに期待するしかないのかと思う。そのようなキーパーソンを行政としてどのように支援していくか、間接のところしかないのかと思う。

委員：自治会長会の課題であり、これからの課題でもあるが、丹波市の自治会の加入率は

70%を切っている。地域でずっと暮らしている者の責任でもあると感じるが、行政が自治会に加入してもらうことを推奨していないと感じている。隣の丹波篠山市では住民登録人口の90%が自治会に加入しているので、ほぼ100%の住民が自治会に加入している。丹波市でも声はかけていただいていると思うが、移住されてきた方へのアプローチが少ないと感じる。自治会としては大歓迎だが、個人の方が家を建てられたり、アパートに入られたりする場合、自治会からアプローチをしても拒否されることがある。行政、自治会、宅建業者がひとつのプロジェクトを組んで自治会の促進を行っているというところも、県下で5箇所ほどある。三田市でもそのような取組をされている。宅建業者がそのような取組をされることは業者にとってはプラスではないかもしれないが、そのようにされている地域もある。私はそのような取組をするべきだと思う。子育て施策について、市独自の施策かはわからないが、他市では不妊治療に対する施策が手厚いと聞いたことがある。どのくらいの方が不妊治療をされているのかは知らないが、そのあたりも考えてもらえればと思う。

委員:私も20年前にIターンをしてきた。当時は自分で自治会長さんから説明を受けて、様々なことを自分で決めないといけなかった。そのときの自治会長さんが本当に良い人で、事細かく説明を受け、納得したら入って下さいと言って下さったので、スルッと入れた。きちんと紹介してもらえるシステムは地域に入ってくる人にとってはとても効果的だと思う。移住促進のほうから自治会長向けに研修会やレクチャーの機会、失敗談や成功談等を伝える学習会のような機会があればお互いに良いのかなと感じた。受け入れる側はあまり情報がないと思うので、そこがもう少し分厚くなれば安心できるなと感じた。

会長:丹波市だけでなく、問題になっていることだと思うが、自治会を中心に考えていくべきなのか。そうではなく、自治会が基本にあるとしても個人的な人間関係を大事にし、親しい人やグループを地域の中に作り、広げていくというアプローチがある。自治会は自治会としてあるのだが、移住定住者に関しては、色々な事をフランクに相談できるような、親しい友人をつくるということを重視すべきという意見もある。行政としては地域の中で人と人とを結び付けていけるような人をサポートしていくような、間接的などが大切ではないかと思う。

委員:家を建てられ、移ってこられても付き合いをされない方もいる。それは価値観の違いもあり、仕方がないことなのかなと思う。自治会側としても、入られることのメリットを伝えていくべきなのかなと思う。公民館活動などは、地域で子育てをし

ていこうというようなイメージの行事を開催することもできる。自治会の行事の中に子ども会の行事も取り込んで参加していただく取組を行ってきた。子ども繋がりで親の関係を深めていくことも大事だと思う。田舎に住んでいて大きくなったものは、蜂が嫌い、マムシが嫌い。自然の中ではそれなりに危険が伴う。若いころ、山日役などにはおじさんたちについて行っていたので、こんな時はこうしたら良いというように、自分の身は自分で守るというような意識だったので、蜂に刺されることもなく、マムシに噛まれることもなく、これまで暮らしてきた。知恵のある方がそのような場に出てきてもらうことが大切なのかと感じた。

会長：山や川で遊ばせたいという意見は確かにあると思うが、山や川は危ないところでもあり、それなりに付き合い方が分かっていないと大変なことが起きる。その点について、市として何か取組はあるのか。山や川に親しむというようなことはあるのか。

事務局：出来るだけ自然に親しんでほしいという思いはあるが、学校では山や川で遊ばないようにしましょうと言っている。

委員：都会の方はボーイスカウトなどの活動もされており、山で遊ぶことを教えてもらえる。田舎で育った子どもよりも、そのような活動をされている子どもの方が自然との付き合い方を知っているのではないかと思う。私たちの世代は特に子どもに対して、危ないから行くなと押さえつけてしまっていたのではないかと思う。私たちが子どものときは山や河原で遊んでいた。それは上の人たちが色々知恵を教えてくれた。自分たちは子供たちに教えてあげられていない。ボーイスカウトなどで教育を受けてきた子どものほうが、知恵があるのかなという気がしている。

委員：公園について、ハード面はいつのまにかさびれてそのままの状態になっていることがある。今あるものを整備するのは良いと思うが、新たにつくるというのはどうなのかなと思う。昔は今ほど物がなかったので、網を持って虫を捕りに行ったり、上級生に教えてもらったりしながら遊びを覚えたという記憶がある。山や川は危険という考えもあるかと思うが、田んぼや溝などの丹波らしさ、ここだからこそ味わえるものもあるのかなと思う。人とのつながりが大事だと思う。大人と子どもたちとで花を植える取組みをしており、清掃をしながらどんな生き物がいるかを見たりする取組みがある。大人も子どもも喜んでいる。強制で「あれしなさい、これしなさい」というと、反発があるかもしれないが、自由に参加できるような取組があっても良いのかなと思う。

委員：大きくなって、丹波市から出てしまうと人口は増えていかないなので、小さいとき

に、ここに居たいなと思えるようになることが大事だと思う。私も子どもが3人いるが、丹波市に居るのは1人だけ。今後も帰って来ないと思う。帰って来たいと思えるような魅力はどのようなものがあるのか、その辺を考えていかないといけないと思う。

委員：公園について、自分の子ども時代を思い返すと、整備された公園よりも整備されていないところ、匂いがあるところを思い出す。夕暮れの中でどこかでたき火をしているような匂いが漂ってくる、田舎の匂いみたいなものが結構強いと思う。公園は既存の与えられたもので、ふるさとを想った時の原風景になるのかな？と疑問に思う。神社で遊んで夕暮れになってきて、どこからかカレーの匂いがしてきて、というようなものがふるさとの原風景になると思う。

委員：田舎にいて、山川に親しんでいないのかな、というのが疑問。与えてあげないと、山や川で遊べない子が増えているということがすごく不思議。医療費が高いという話があったが、丹波市は普通より高いのか。

事務局：丹波市が高いというよりも、丹波医療センターは二次医療機関ということになるので、紹介状を持って行かないと初診料を取られる。一般に、まちのかかりつけ医に産婦人科医がいらっしゃったら、そこに初診で行くのは安いということになる。丹波市には二次医療機関しかないので、診療報酬が高いところいきなりいくことになる。さらに、妊娠確定までは医療ではみられないので、妊娠が分かってからは、健康課の事業で妊婦検診の助成のチケットがあるが、わかる時までが自己負担となるので、そこも支援していこうということを検討しているということ。

委員：働く女性の環境整備が必要という話があったが、コロナの時期というのは仕事が激減したりする中で、女性が、子どもがいるので休みますと言うと、「有休をとってください」や「もう来ないでください」と言われることがある。通常時でも、急に仕事を休むことになると、会社側としても困ることがある。そのために、同じ仕事ができる人材を確保しておく必要がある。テレワーク環境を整えることも、子育て環境をよくすることにもつながっていると思う。

副市長：公園の整備についてや、山や森や田んぼなどの自然を活かした遊び場の提供などについて、様々な意見をいただいた。子育て世代のニーズに合わせ、あそび場を提供していくのか、ニーズとは違って丹波市独自の遊びの場をアピールしていくのか、どちらの方向で進めるのかということかと思う。丹波市の独自色を出していくなら、自然を全面的に出していくことになると思うが、子育て世代

のお母さんに困っていることを尋ねると「小さな子どもを連れて安心して遊べる身近な公園が欲しい。」という声が多い。これは本音のニーズかと思う。こちらのニーズに対応していくため、身近な公園にそれぞれ特色を持たせ、公園を整備していこうかと考えている。

会長：挙がっている施策に反対している人はおらず、進めていただきたいと思う。施策の周辺を取組をもう少し見えるようにならないと、どんな背景で公園を整備するようになったのか分からない。これまでの丹波市の公園の整備について説明があるともう少し見えやすかったかと思う。ハッピーバースパックの取り組みもよいと思うが、丹波市は出産時に周りから祝福されていると感じる機会が少ないというのは、本当にそうなのだろうかと感じる。出産時にこういう支援や取組を行っているが、ここにこれだけ上乗せして取り組んでいくというような説明があれば良かった。ハッピーバースパックは母親目線で、地元の物を活用していただきたい。市としてどの方向で取り組むかという話があったが、ある程度丹波らしさも併せて考えていく必要がある。今の時代は自然から遠ざかってしまっている。だからこそ、農業体験や林業体験などで自然に親しむということを学校教育と併せて考えていく必要がある。

(2) ポストコロナによる社会情勢の変化を踏まえた人口減少対策について

・第2期丹(まごころ)の里創生総合戦略によるポストコロナ社会の人口減少対策(案)

【資料4】

※事務局より説明

・丹波市移住定住促進業務～現場から見える傾向～【資料5】

※中川委員から説明

質疑・意見

会長：空き家はたくさんあるが、良い物件がない。空き家バンクに出していけるようにすることが必要。子育て世代は悩みが多い。それを、時間をかけて丁寧に解きほぐしていく中で、今悩んでいることが丹波市に移住する事で解決できるというような希望や道筋をみせていく、気づいてもらうことが大事。

委員：インバウンドが減っている中で、高級食材が非常に打撃を受けている。丹波市の秋の特産物は高級和菓子や京都のお店で使われることが多く、心配をしている。

委員：農家は、今は元気。売り止まりが出てくると元気がなくなる。今年、スイーツフェ

スティバルは開催しない。業者の中には、イベントを開いてコロナが出たときの損害を心配されている人が多く、消極的になられている。丹波三宝のお菓子の詰め合わせを様々なところで取り扱ってもらっている。コロナ影響でイベントが中止になり、参加予定だった方にお菓子を贈る取組みを行われているところもある。移住施策について、徳島の方だったと思うが、市の施策として技術者を積極的に受け入れているところがある。丹波市としてはどのような人を受け入れようとしているのか。

委員：販路が閉ざされたときに、地域の中で購買力を高めようという機運は市民を巻き込みながら高まってきたと感じる。閉ざされたときにどのように商売をしていくかを考えたときに、小さな事業所はホームページひとつ作れない。そうすると、人が来ない、物が売れない状況に陥ってしまう。そのようなときの為に販路を確保できるような仕組みが必要だと感じる。

委員：丹波地域の有効求人倍率が2ヶ月前に5年ぶりに1倍を切った。リーマンショックの時に丹波地域に入ってきた企業の人材が優秀だと聞いている。企業にとっては取り時。有効求人倍率は落ちてきているが、確実に人材を取ろうとしている企業がある。その時に行政が何をするのか、どんな支援をしていくのか、工業会などから、市に何を望むかを聞き取り、企業との連携を進めるべき。また、若い人へUターンを促すにもとても良い時期。

委員：今年度県の事業で、コワーキングスペースを整備した。仕事も家で何でもできるようになってきているので、わざわざ仕事の道具を持って、行くかな？と感じることがある。丹波には自然があって良いなと思ったことはあったが、どこも同じ条件だと考えると、難しいと感じた。何を目的に丹波に来ていただくかが悩むところ。

委員：家にいてもできる、新しいサービスを考える人が出てきていると感じている。私の会社にも移住してきた人、都会から来ている人がいる。特色のあるものづくりをし、移住してでも来てもらえる努力を企業がしていくことが必要だと感じる。地域にいる人が地域のことを誇りに思い頑張っていかないと、都会から来る人の気持ちを動かすことはできないと思う。

委員：コロナの影響で、相談に来る人が増えてきている。シングルマザーへの支援や地域共生社会を推進することが必要になってきていると感じる。社会福祉法がこの6月に改正され、国の交付金を使って新たな分野横断の事業に取り組むことができるものもあるので、積極的に取り組んでいくべきであると思う。

委員：ビジョン委員の方と話をする機会があり、その方が、「丹波はすごくいいところだ

けど、水道代がとても高い」と言われていた。最初からそのことを分かって来られているかと思うが、やっぱりそこが一番ネックになっていると感じておられるので、このことを言われたのだと思う。移住するに当たって一番ネックになる事、ポイントになることは実際に経験された方にしか分からない。実際に丹波市でテレワークをされている方は少ないのではないかと感じるが、その方に良かったことと困っていることを聞いてみたいと思う。

会長：30～40代の女性が自由に働けるような、職場を支援しく仕組みなど、丹波らしさを考えていく必要がある。もう一步踏み込むためには、移住してきた人から意見を聞くことが必要だと考える。他の市町と状況は変わらない。その中でなぜ丹波市を選ぶかというところがポイント。そこを考える必要がある。

政策担当部長：30歳前後の女性やJR沿線の阪神間からの人を政策ターゲットとしている。丹波市でなくても使える内容だという指摘をいただき、もう一步踏み込む必要があると感じている。一方で、新たに移住をしてくる人をターゲットにしつつ、今丹波市に住んでいる人がここに住んでいて良かったと思える、住民の満足度を上げることがとても大切だと感じる。

会長：若い女性をターゲットにするなら、若い女性から見た戦略を考える必要がある。

6 次回推進委員会開催日程

日時：令和3年1月予定

7 閉会